

鬼神と人とその動き——招福除災のまじなひに

本稿では、災ひを攘ひ福を招く、そうしたまじなひ世界を中心に、中世を生きた人々と鬼神をめぐる想ひ、祈りを垣間見たいと思います。まじなひ世界の研究は殆んどなされて居りませんから、ここに、私の意のあるところを記しましてご批判、ご教示を得たいと思います。

一、鬼字のいろいろ——鬼の分化に

昭和三七・八年、新潟県にございます著名な庄園、奥山庄の調査が行なわれましたが、その際、中条町の江上館跡の発掘調査が実施されました。その成果は昭和五二年、中条町教育委員会から報告書「江上館跡」として公開されました。私はこの報告書を細きまして非常な驚きを覚えました。そこには「鬼」という文字とは少し趣きの違う「魍」という文字をしたためた一つの小土器片の写真が掲載されていたからであります。勿論、私も古い教育を受けた人間、ですからむつかしい「魍魅魍魎」といった文字も知って居ります。しかし「魍」字は平常余りなじみがない、記憶にない文字でありました。早速、架蔵し

て居ります呪法書——まじなひの本を繰りました。確か「鬼」字の「ム」を他の字で変換して字を作り出す、そうした例が数多く見られることを承知していたからであります。

開きました一冊、「中山御符秘抄」、その上巻に「魍、呪咀返又ハ人留ニ、亦中能ナルニ用」といった一文を見出しました。続けて、その下巻に「魍、呪咀返ヨクナル」、「魍、人ノ口ヲトムルトキ」、「魍、離別」といった文のあることも判りました。何と発音するべきか、その実際は判りませんが、この「魍」字を用いる目的、魍字の用



途はここに明確となったわけでありませぬ。上巻、下巻、その間に若干、語感の違いが見られますが、要するに「呪咀を返して良くなることを願ひ」、「人留め一人の口、人の足を留め封じることが祈る」、時には「人をして和合、離別させんことを謀る」、そうした時に用いるまじなひの文字―呪字であることを知りえたのであります。

たとえば『法華経秘法』と題する一書を見ますと「口留呪」として、中央に南無妙法蓮華経・日蓮在判としたため、右側に波婆可鼻眞言・鬼子母神、左側に南天竺宝塔中、十羅刹女と記し、在判下に「口則閉塞」と書くまじなひを掲げて居ります。この札には「誦ハ十羅刹女口則閉塞ト可留」と注がつけられていますので、「十羅刹女、口則閉塞、留ム可シ」と誦する呪儀が伴っていたことが出来ます。こうした「口則閉塞セシメヨ、留ム可シ」という誦句を目の前にしますと「𪛗」字の口を容れる意味がよく判るかと想います。口を封じることが本義としまして、人留、呪咀返、和合離別といった諸方面に効用が及ぶと考えてよいのであります。

ところで、改めてこの江上館発見の小土器片―坏形土器の反面を見ますと興味ぶかい墨描きがたどれます。中央に大きく太く描かれた足を想わせる絵があります。左に「神」字、右に「人留」の二字がのこされているのであります。この絵の足、「人留」の文字はまさに『中山御符秘抄』の語る「𪛗」字の効用―人留と鮮やかに一致するのであります。したがって、この江上館で往時、人留の呪儀がとり

行なわれたことが判明してきますのであります。それだけではありませぬ。この坏形土器片と共に見出されたいま一片の坏形土器片には「急々如律令」の句が墨書されています。この句は「速やかに正常に還れ」、「速やかに鬼よ去れ」といった意味をもつ呪句であります。

この二点の土器が蓋と身として口を合せて結び合せられていたと考えることもまた可能かと存じます。いずれにしても、恐らく不測の事故なり災ひがありまして、「人留―口留・足留」の呪儀を実修し、その攘災を願っていると見てよい、そのように思うのであります。こうした二つの土器は、江上館の中樞、土塁の西南隅積土下、言い換えますと館の裏鬼門に埋められていたということでありませぬ。館の邸宅内で呪儀をとり行いましたのち、こうした裏鬼門に呪坏を埋めたと考えてよいのであります。いずれにしても、人留―足留・口留・走人留―の呪儀であり、鬼の足、鬼の口、鬼のわたらひを封じよう、ひいては鬼が発動する呪咀を還そう、鬼がなす和合離別への動きを留め止めさせようとする、そうした内容の呪儀であったと見てよいのであります。鬼を封じその力を抑止させようとする、そうした心根に基くまじなひなのであります。

「𪛗」字を墨書しました一枚の坏、その語るところは、中世こうしたまじなひ世界が人々の間に深く浸透し息づいていたことを物語る意味で極めて重要な役割を果すのであります。しかし、「𪛗」字のもつ意義はそれに留まらないのであります。実は『中山御符秘抄』には、

といった呪符が記されて居ります。「瘡落ル咒」とありますように瘡病に用いる符であります。左手には魃魃月鬼唸々如律令、右手には魃魃日鬼唸々如律令と書くように指示しているものと見てよいかと思えます。注目されるのは、魃魃の三鬼字であります。まさに「ト・ム・ル」とありまして、鬼の動き―瘡病を止むる意が卒直に表現されているのであります。呪法書中には再三、再四見られる表現ですが鬼字の用法を語りえて妙というべきであります。

ところで、昭和三十六年、私は奈良市中院町にあります元興寺極楽坊境内の発掘調査を担当いたしました。その際、重要な一点の木札を発見いたしました。



図に掲げましたように、八万四千六百五十四神王といった文字が明瞭に読みとれる札であります。尨大な数字の意味するところ、如何なる性格の神王であるかが問われるのであります。注意いたして居りました所、偶々囁目いたしました「本朝怪談故事」の中に

案ルニ祇園牛頭天王ハ又ハ感神院ト号ス。洛ノ東山ニアリ。御輿ハ三社也。素盛鳴尊ト、八王子ト、稲田姫ト也。「祇園縁起」ニ曰、

「天竺ノ北ニ国アリ。九相ト名ク。其国ノ王ヲ牛頭天王ト云フ。又ハ武塔天神トモ云。則、八王子ヲ生ズ。是ハ八将神ト云。其眷属ハ萬四千六百五十四神アリト」

といった記事がありまして、その不審が解けたのであります。「統群書類従」に収められています「祇園牛頭天王縁起」にも、確に「南無大悲牛頭天王、武塔神婆利采女八大王子：各々八萬四千六百五十四神等眷属守護」とありまして、この八萬四千六百五十四神王が牛頭天王の眷属たる神王を指す言葉であることを知りえたのであります。こうしたことは荒神にも見られます。先の札を発見いたしました元興寺極楽坊には有名な「荒神和讃」が遺されていますが、その末尾に荒神の眷属として、実に九億十四萬三千七百五十四神王のあることが記されています。中、近世を彩る牛頭天王、荒神、そのもとにあつて働く眷属として、こうした尨大な神王が組織だてられて息ずいていたのであります。ところで、この八萬四千六百五十四神王―牛頭天王の眷属の機能を考えますときには、どうしても牛頭天王について語らねばなりません。先程の「祇園牛頭天王縁起」などの説くところによりますと、牛頭天王が婆梨采女を后としたかと思ひ尋ね行く途時、日暮れて止むなく巨端将来に宿飯を需めたところ巨端将来は肯せず、憤怒した天王は貧者蘇民将来に宿飯を需める。蘇民将来は丁重にもてなし天王は喜びつつ旅に出る。帰途、牛頭天王は蘇民将来に福を授け巨端将来を討たんとする意を告げる。蘇民将来は娘が巨端将来のもとで使役されて

いることを述べて助命を願う。天王は「蘇民将来之子孫也」といった符を与えこの符を佩びる者は救わんと告げ、巨端の宅を囲む。ここで八萬四千六百五十四神王が順番となるのであります。天王の意を知った巨端将来は鉄壁の囲い、千人の法師を請じて読経し一步だに内に入れじと対応するのであります。隻目の一法師が飽満飯酒の故あって酔眼、ついに経を読みえずという事態になり、八萬四千六百五十四神王はその虚をついて乱入し、蘇民将来の娘を救い遂に巨端将来を滅すという筋書であります。この話は八萬四千六百五十四神王が牛頭天王の意をうけ、指丕を得て動く様子を見事に語り得ているのであります。

牛頭天王は京都祇園威神院に祀られる神であります。天王の下に八人の王子―八王子（将神）があり、その輩下眷属として八萬四千六百五十四神王が位置づけられているのであります。きちんとした神統譜、組織がそこに設けられているのであります。武士・土豪などに見られた兵事組織にも似た組織観がたどれるのであります。従いまして、元興寺極楽坊の木札は、牛頭天王や八将神（八王子）にとどまらず眷属たる八萬四千六百五十四神王までも符に託し、疫病―流行する病ひに対応しようとしている、流行する疫病を却けんとする意を鮮やかに示しているのであります。

国会図書館には『まじなひ秘伝』と題した一冊の呪法書があります。その内に下のような注目すべき呪符が記し留められています。

種子は大日、八萬四千六百五十四神、末の種子は不動で急々如律令

八萬四千六百五十四神
大日
不動

と書くものであります。元興寺極楽坊の木札に比べて、大日、不動といった強い摧破の力をもった仏格を前後に配しており、少し複雑な姿をとっています。この呪符につづいて同時に用いる符かと考えられます。隣に掲げられています。種子は薬師、続いて、咄天罡牛頭天王、五行、天形星を配置して急々如律令と書いています。咄天罡は天帝が天形星に命ずるという意味であります。牛頭天王・天形星は後に習合して一神化してしまう存在であります。旧は牛頭天王は厄神の雄であり、この牛頭天王を鎮めるものが天形星だと考えられておりました。益田侯爵家本『地獄草子』はこうした天形星が疫鬼牛頭天王を酢に浸して食する様を実に見事に描きました。絵巻の一部であります。ところで、最近、東大阪市の西ノ辻遺跡を発掘いたして居りました所、中世の井戸の中から一枚の木札が発見されました。

札は長さ十二センチ強、幅三・三センチ程の薄板で、頂きを緩やかに尖らせ頭部に刺りを入れて吊ったり、結べるように形をととのえています。その表に「蘇民将来子孫也」の墨書きが見られるのであります。調査をしました東大阪市文化財協会では十三世紀の札だと説いて

蘇民將來子孫也

穂積牛子

居られます。この札は、文字通り蘇民將來札でありまして「祇園牛頭天王縁起」にもありますように、蘇民將來子孫也と記す札が牛頭天王による巨端將來破滅時、唯一助け出される娘さんの佩びる札として息づいていたとする説話に基づいて社寺から出される札となっているのであります。この西ノ辻遺跡の北東四〇〇メートルの地に著名な石切劍箭神社があります。古くからこの地は物部氏の一流、穂積氏の居住地であり、築かれた寺院は法通寺（穂積寺）と呼ばれ、神社は別名、木積宮（穂積宮）、宮司家は木積家（穂積氏）でございます。この木積宮が或る時期、牛頭宮と呼ばれたこともあるようでございまして、そうした版木も遺されております。十三世紀、牛頭天王社としてこうした呪札を頒けていたこともまた推測されるのであります。大阪府下では柏原市片山、豊中市原田遺跡でも、ほゞ相似た形、同文の木札が発掘されておりまして、中世、非常に流行していたことが知られるの

であります。

天形星、牛頭天王、八将神、八万四千六百五十四神王といった疫神世界の整然たる神統譜を見、またこうした鬼神と係り合います蘇民將來、大日、薬師、不動といった存在を考え合せて見ますと、中世、近世の尨大な鬼の姿の片鱗に触れることが出来るのであります。

三、若狭国小濱六郎左衛門子孫也

牛頭天王を丁重にもてなし一宿一飯を供した蘇民將來は富み、もてなさない巨端將來は滅ぼされる。そうした説話と関連して注目される資料を一つ取りあげて見たいと思います。それは疱瘡神との係り合いをもつものです。例えば『修験深秘行法符呪集』の巻八には「疱瘡除守呪事」という一項がありまして、疱瘡守として「若狭国小濱六郎左衛門子孫也・内符」といった御守札の書文を掲げています。そして「疱瘡守、此を家々にはる、口伝、瘡神若狭通る時此に宿す。疱瘡直めやると誓ひて、我が子孫とあらは向後恩の為めの守と也」と註してあります。良く似た例を求めますと、私の架蔵して居ります「御祈禱大事」という写本には「湯尾峠御孫嫡茶屋☆」といった疱瘡の守を掲げております。同じ札については大日本興靈学院実験部が編纂しました『神道仏教禁厭祈禱秘傳』にも「越前国猪尾峠之茶屋之孫赤子」と書く護符を疱瘡除けの守として持つよう指示しております。湯尾峠と猪尾峠、文字こそ異なりますが、同一の峠ですし、御孫嫡茶屋では意が通

じませんが茶屋之孫赤子ならばよく通ずるのであります。現実に『増補呪咀重宝記大全』には「越前国猪尾之峠之茶屋之孫赤子」と記す札を掲げて居ります。



ところで、こうした若狭国小濱六郎左衛門子孫也、越前国猪尾峠之茶屋之孫赤子といった二つの札が猪瘡神を除くまじなひ世界に登場する意味は、先に記しましたように「瘡病、若狭通る時此に宿す」という言葉に暗示されているかに思われるのであります。猪瘡の流行は、猪瘡神の道行きに他ならないと考えられているのであります。その道行きの途時、宿る所として「若狭国小濱六郎左衛門宅」なり「越前国猪尾峠之茶屋」がある、そう解釈してよいのであります。「子孫也」とか「孫赤子・孫嫡子」の言葉もまた重要であります。猪瘡神が宿り行く宅・茶屋、その一宿一飯の恩頼に謝して、その子孫なり孫赤子

(孫嫡子)を猪瘡から守ることを瘡神が誓約しているのであります。このように書きました札を所持佩用するものは猪瘡を患わずと瘡神がのべている。そのように読んでよいのであります。

このように猪瘡神の世界を見ますと、先程の牛頭天王と蘇民将来の間にとりかわされた「蘇民将来之子孫也」といった札との相関は一目瞭然であります。恐らく蘇民将来札を手本に、或ひは同様な想ひといった形をとってこうした二種の札が福井県一若狭・越前で成立したものと考えられます。小濱六郎左衛門宅は若狭を、猪尾峠之茶屋は越前を猪瘡神が通りますときに、一夜の宿りと一飯を供した篤信の家と考えられるのです。牛頭天王はその容貌「頭に黄牛の面を載き、両角尖ること夜叉の如し、……その相顔佗に異り……四姓みな悲嘆す」と説かれますように怪異異様なものがありません。猪瘡神もまた同様、疫神にふさわしく汚穢・異様でありまして、常々人々から忌み憚られ、うとまれ避けられる存在でありました。それだけに猪瘡神を丁重に遇した人々の宅や茶屋だけは、子孫や孫嫡子に至るまで、この札をもつかぎりその恩頼にこたえるために猪瘡には患らせないとする猪瘡神の意図が働いているのであります。現実に猪瘡神を演じたり語りつつこうした宅や茶屋をまわり行く、そうした人もあったかと考えられますが、いずれにせよ流行する猪瘡の中で、一人だに罹らぬ家があれば、一層その想ひがつのるものと見てよいのであります。若狭国小濱六郎左衛門宅、越前国猪尾峠之茶屋はそうした猪瘡神を祀り、またその札を

行疫神の世界に成立しておりました六十二王子といった観念、構成をそのまま疱瘡神の世界に転じて先きの符が成立していると見てよい、そう私は想うのであります。

『深秘集』の牛頭天王札は、「門に立つ可し」と指示されています。

強力な存在、牛頭天王が家門にこうした札をたて、疫鬼がこの屋敷に入りこむ、この家を犯す、そうした事態から守ろうとしているのであります。疱瘡神もまた同じように挿し立てられて、同様な効をもたらしめるものであったといえるのであります。この場合、行疫神牛頭天王を下敷きとして疱瘡神の姿がイメージされ、世界が創出されていると言つてよいのであります。

四、疱瘡之悪神狸々と隠元禪師と

疱瘡について注意いたして居りますと時に興味ぶかい資料にぶつかることがあります。最近、丹後の加悦町金屋にお住まいの杉本利一さんから安永二年三月廿八日の後書きをもちます「吉例疱瘡之書」という一書のコピーを頂きました。疱瘡に対する種々の医方やまじなひを記して居ります。その中に、疫靈―疱瘡神として狸々の人形を作りこれを神体としてまつこと、燈明や赤紙を口につけた徳利に神酒や、小豆飯や赤鱒をそえてこの狸々の形代―疱瘡に供え、三日間まつこと、その後は神―疱瘡神を送ると称しましてこの狸々の人形を門前から河辺へ運び出し流しやる……といった注目すべき呪儀が記されてい

るのであります。

赤面の狸々、赫々と燃える燈明、赤紙をつけた酒徳利、赤く炊かれた小豆飯、赤色に染まる鱒、全てが「赤」に象徴されていることも興味ぶかいことでもあります。このことは疱瘡が赤く身体を変え、相関していることでありまして、疱瘡神の色を「赤」と見立てていることを暗示しているのであります。言葉を変えますと「赤い疱瘡神の故に狸々が神体となり、供物が赤色で統一されると言えるのであります。『吉例疱瘡之書』が語りますいま一つ重要な事実は、疱瘡神を川へ流しやる、被い流すといった意識がありありと見られることでもあります。奈良時代の平城京では数多くの被の資料が発掘されております。人形代を刻みまして、これを一撫一吻、身を撫でて穢氣を移し、息を吹きかけて病氣を移す、こうして汚穢、疫病を人形代に移し背負わせまして川へ流しやる、そうしますと穢れや病ひは全て海に流れ行きやがては消散するものと考えられていたのであります。我身に代る人形代に、我身の穢、病を背負わせる、その時点で「清浄な現世の我身」と「負を担ういま一つの却けるべき我身」の二者が生まれるのであります。奈良時代も、またそれ以降にもこうした人形代―負の我身、穢・病氣をつけた人形代の被い流しが随分と盛んであります。それについても想い出される資料がございます。平城京や長岡京などでは私共が人面墨描土器と呼んで居ります壺が次々と発見されております。小壺の胸部にむさい鬚や髭を一杯に表現した顔が二面・三面



と描かれているのであります。私はこうした顔は胡神―胡鬼といった行疫神の表現だろうと考えています。「延喜式」や「西宮記」といった書物にはこの小壺に石や玉、餅など依料を容れまして壺の口を一旦封じて天皇に捧げるといった内容が記されています。天皇はこの封じた和紙に小穴をあけ、そこに息をふきこまれるようであります。そうすることで天皇の身体内にたくわえられて居りました罪や穢、病や疫気がこの壺に封じられることになり、行疫神がこれを背負い、やがて川に祓い流されていくといった考え方がされているのであります。

最近、山形県酒田市で俵田遺跡の発掘調査が行なわれましたが、旧河道が出現しましてその河畔から驚くべき資料が発見されました。それは、人面墨描土器と人形代と馬形代、刀形代、矢形代からなってお

りますが、整然と配置されたままの姿で発掘され、祓所の實際が極めてダイナミックに復原できるようになりました。中心に据えられた人面墨描土器、まわりにキチンと挿したてられました人形代に実に大切なことですが、「磯鬼坐」といった文字が書かれていました。磯はこの地域に磯部氏が居住していたものと考えられますが、その磯部某に憑きました鬼―行疫神・鬼がここにいるという意味であります。言い換えますと、病に伏せる磯部某にとりついて居ります鬼の体―坐としまして、この土器と人形代があると言うことでもあります。行疫神と申しますか疫病神といえますか、そうしたものをこの土器・人形代に移して流してやろうとしているのであります。疫病神に疫病を背負わせて流すと言ってもよいのであります。

流行病がはやりますと平安京では船岡山で疫神をまつりまして、これを興にのせて町に繰り出しやがて賀茂川に流すといった大がかりな呪儀も成立して参ります。室町時代、文明三年に痘瘡が流行しました際の情景を『親長卿記』は「文明三年後八月六日、痘瘡之悪神を送ると称して、所々囃物あり、毎日の事なり。七日、今日、町に痘瘡之悪神を送り囃物あり、室町殿御前、北小路御前などこれを渡すべし」と記して居ります。痘瘡之悪神がどのような形で作られていたのかは記されていませんが、「送る」という言葉にも示されていますように、形代、神体となるものがあり、町境の川から流してやる情景が窺えるのであります。『吉例痘瘡之書』に描かれた痘瘡神―形代・神体たる

狸々の被ひは江戸時代の記録ですが、こうした行疫神、流行神の被流しといった古代から脈々と息づく呪儀の伝統をふまえて成立している、そうしたことが読みとれるのであります。

ところで、何故、狸々が疱瘡神に見立てられ、その形代が神体と見做されるのでしょうか。ここに注目したい一書があります。「重修本草綱目啓蒙」という書がそれです。「本邦痘瘡ノ家ニ狸々ノ形ヲ作りテ祭ル、痘瘡ハ色紅ナランコトヲ欲ス、狸々ハ酒ヲ好デ酒ハ一身ヲ順ラシ紅色ナラシムル故ナリ、往昔、黄壁山萬福寺ノ開山隠元禪師、此ノ狸々ヲ祭ラシメ、痘瘡ヲ輕クスル禁呪ヲセシコトアリ」といった記事が見られるのであります。痘瘡は疱瘡（天然痘）のことです。

狸々の形を作って祭るといふ意味は「吉例痘瘡之書」の一文を重さねますと、それが痘瘡神の神躰であり同様にまつられている情景が読みとれます。確かに疱瘡の赤斑を出し顔面が赤く色づく症状が、酒を好み常に赤面していると説かれる狸々と重なり合う所から、狸々が疱瘡神の神躰と見立てられているのであります。「淮南子汜論訓」の高誘の註に「猩猩人面獸身黄色、又嗜酒」とありますように、中国同様、人の姿をとり神にイメージされる面軀、人や神と同様、酒を嗜む性格が「疱瘡神」の根源にあるわけです。ところで、いま一点、狸々と深く関連づけられる形で萬福寺の隠元禪師の名が見えることも重要であります。伝承の是非は別といたしまして、萬福寺を中心に疱瘡神の呪儀が展開したことは十分想像されるところであります。この伝承

を信ずれば狸々を神躰として疱瘡を鎮める呪儀は隠元禪師を介して江戸時代前期、一七世紀後葉に展開してくると説くことができるかも知れないのであります。

この隠元禪師は中国福建省の人であります。請われて承応三年七月長崎に着き、萬治元年、江戸で將軍家綱に謁し、寛文元年には京都に萬福寺を創建して居ります。彼が日本に着きました直後、後光明天皇が疱瘡でなくなられ、嗣がれた後西天皇も疱瘡を患って居られます。「倭訓栞」には「主上御胞瘡の時は山王の猿も必ず痘を病むは一奇事也、後光明院崩御の時、坂本の猿かろき胞瘡したり、新帝御医業の時、山王の猿、もがさ（疱瘡）煩ひける……ほどなく猿は死けり、帝は本復あらせたまふ」とありますように、隠元禪師が長崎に着き萬福寺を開基するまでの間、天皇と疱瘡、衆庶と疱瘡は深い係りを見せています。その上、主上と日吉山王社の猿と天皇の疱瘡に係る話が巷間に流布していたと考えられるのであります。隠元禪師が猿に近い「狸々」を発想されることも十分にありうる環境であったと考えられるのであります。

ところで、この「重修本草綱目啓蒙」は先の文につづけて「故ニ禪師入定ノ後モ祀ル者アリテ、好事ノ者、唐土ノ不倒翁ニ擬シテ、禪師ノ形ヲ作り為シテ、相共ニ祭ラシム、今ヲキアガリコボシト云人形是ナリ、……小兒ニ祝シテ玩ビノ小人形トスル者ニシテ、今ニ至テ、痘瘡ノ家ゴトニ、猩猩トキアガリコボシト祝物トス……以テ痘瘡

ノ守護神トス」とあります。狸々を疱瘡神の神躰、形代と位置づけました隠元禪師が達摩と重ねられまして「起上り小法師」として形象化され、狸々との起上り小法師を組合せて疱瘡に患り易い小児の遊び物とする慣行が生じたことを伝えています。

比叡山麓日吉山王の猿を基盤に誕生しました「狸々」＝疱瘡神神躰説は、その説を説いた隠元禪師と共に形象化されまして小児の祝儀、玩物としての姿をとるのでありますが、そこには「疱瘡ばらい・疱瘡之悪神送り」の原点がなお色濃く伝承されているのであります。萬人の厭う疱瘡が如何に人心を捉えていたか、鬼、鬼、鬼といった神統譜、狸々といった異態の神躰からも辿れるのであります。

五、天虫と呪符と虫歯のまじなひ

私の架蔵して居ります呪法書の一に書題を失いました一本がございます。書の末尾に明治十九年三四月蔵書といった一文を見ますが内容は仲々興味ぶかい呪法を伝えています。その一に「虫ばのまじなへ」という項があり、次のような呪符を掲げています。四隅に以点を打ち、



その中、天地左右に天虫の二文字を天字外側、虫字内側に配して書くものであります。下には同様天中の文字を配した上に四縦五横を

書く呪符が掲げられています。二種の符と見てよいと考えます。何故

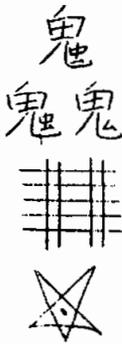
この呪符が虫歯のまじなひになるのか、一見ただけでは理解しがたいものであります。そこで虫歯の呪符を諸書に求めますと例へば伊勢善光寺所蔵「虫歯ノイタミヲ治スル秘法」という切紙には、虫歯之妙法と題して「虫是江南虫、卻来食我齒、針有縁頭上、永世不還家」といった呪句を掲げまして、右ノ文字ヲカキコマカニヲリテ右ノモンジヲ七返クリカエシテヨミ、ソノウチニ頭ノ字ノ所ヲ、クギニテ打ベシ、タチマチニ虫歯ノイタミナルナリと述べて居ります。こうした一文を見ますと虫歯は字義通り齒に虫がとりつく、虫＝江南虫がとりつくことで虫歯の痛みが生ずると考えられていることが判るのであります。

虫頭に釘打つことで虫を封じその動きを止めようとする呪儀が五字四句の呪句を書きました呪符に伴っているのであります。このように見て来ますと、先の一書の天虫もまた齒にとりつく虫歯の根源としてある虫の様であることが理解されるのであります。虫歯や齒痛は天虫によってひき起される症状、病痛と人々には考えられていたのであります。

では天虫とは如何なる虫であるかが次に問われる所であります。そこで参考になるのは「神秘神靈秘法秘伝」なり「呪明重宝記」に掲げる「むしくひ齒のまじなひ」であります。後書では、「天ぢくの天野川原で葉を喰ふむしの供養」と三返となえて、さて次に梅の木の楊枝をいたむ齒にくわへさせて楊枝のさきに灸三火すべし」といった記事が見えるのであります。天竺の天の川原に居て葉を喰らう虫、この虫

通ずる構図をもっております。鬼字に余字を容れました文字は「余」が除の略字ですから、符としては虫―鬼を除くという意趣が読みとれる訳であります。五行の上の傘形に近い表現は天虫の字を正しく書けなかった可能性もあります。いずれにしても齒に棲む虫を除く場合と同様、虫―鬼を除くことで小児の虫を除こうとしているのであります。

また下符は日天の二字を天地左右に置き、その間に鬼無の二字を容れています。日天は大日天王の略かと思われまますので、その図の鬼無が意を示すこととなります。鬼の働きの失せることを願う符形であることは言うまでもない所です。四縦五横を配してその願いの如意を確実にするべく謀っているのであります。ところで、ここで一言申し上げたいことがあります。実は今のべて参りました符は「小供虫御符」と題記されて居りまして「虫齒之符」とは異るといふ事実であります。言い換えますと、小児に寄りつく虫、鬼の世界と齒に寄りつく虫、鬼の世界がともによく似た呪符を用い、共に虫、鬼を除こうとしている事実があるということでもあります。このことは「仏教法華禁厭妙御符秘書」中の子供カン（疳）ノ時吞御符としてかかげて居ります



上図の一符も、またよく共通していると言えます。虫―鬼を抑止することで疳を癒そうとしているのであります

ますが、この場合の虫―鬼は私共が平常「疳の虫」と呼んで居ります虫を指しているのであります。ここまで述べて参りますと諸病の根源

に常に鬼なり虫が考えられ、対応する呪符として同趣同巧の符形が僅かに変化活用させる形で数多く誕生している様が見事に読みとれると申してよいでしょう。

虫・鬼といった形で人の身体の随所に巢食い、人をして苦惱に陥し入れる、そうした存在に対して極めて具体的に呪符を定め、呪札を作り、そうした力で虫、鬼を鎮めんとしているのであります。中世のまじなひ世界の基盤がそうした所によみとれるのであります。

六、驚風虫鎮と剣呪と六字経法と

齒に棲む虫、虫齒、齒痛の根源に虫の存在を想定し、この虫に天虫の名を与えていることについては先にのべましたが、この天虫に話題を帰しますと興味ぶかい一本が浮かび上って参ります。「驚風虫鎮諸呪秘傳」と題する一書がそれであります。この書は摂津西宮神社神主吉井和泉守直傳の秘法書とされて居ります。驚風といひますのは小児の熱病であり成長するまでに治しえない場合は癩癩となると説かれています。熱高く下痢し身は瘦せ腹脹り乳飲まずといった症状を呈する病であります。実はこの病も「驚風虫」、或ひは「驚動風蟲持」と呼ばれる虫によってひき起される病と考えられて居ります。病を癒す呪法が「驚風虫鎮」、「驚動風蟲加持」と名付けられているのであります。「驚風虫鎮諸呪秘傳」には、こうした病本復の呪儀が詳細に記されています。その儀式次第は、最初に四方の神に三つ宛牒と肴を用意して

神の降臨を願い、六種清浄大祓、一国一社之祓、荒神之祓、無上之祓、三種大祓といった順序で祓が続き、次に十種神宝加持、三元三行三妙加持、以我行神力神道加持と加持が続く。その後、龍印を結び、呪儀の秘事、劍祓を取り其の児の腹を撫で下ろす儀が三度繰り返されて終るとされています。この「驚風虫鎮」の儀式は降神、病児の清浄をはかる祓、鎮魂をはかる加持以上に、驚風虫の追い出しといった呪儀に中心が置かれて居ります。この驚風虫の追い出しに用いる支度之物には「劍祓」があります。この劍祓、内に大麻を入れ、中に「天ノ虫汝下ニ非乎」と三行に朱書し下に「邪氣祓」と墨書し、表に「無上ノ祓」と書くものであります。この劍祓を手にして小児の腹を三度撫で下ろして驚風虫を鎮めるのであります。実はこの呪儀に際して「夫レ天ノ虫汝下ニ不有ヤ」と三度の撫下しに合せて三度と唱えたと記されておられます。ここに再び「天ノ虫」が姿を見せるのであります。先に虫歯―歯痛の根源が「天虫」にあることを説きましたが天虫には、天竺の虫、天川原の虫の二様がありました。この驚風虫鎮に姿を見せる虫は西宮神社に係るだけに神道風―天川原の虫と見てよいかと思います。こうした天虫を小児の身から祓い出すことにより驚風虫病が癒えると考えられているのであります。劍祓をとって三度「夫レ天ノ虫汝下ニ不有ヤ」と唱誦しつつ腹を撫でるといった積極的な呪作がそこに伴っているのであります。

劍祓は、時に幣と考えられ、時に劍と考えられ、神意の宿る神軀と

もいうべきものであったと言えます。こうした在り方は、常々刀劍の世界でも見られるのであります。たとえば「天台南山無動寺建立和尚伝」は、延暦寺無動寺開創相應和尚の伝記であります。西三条女御の病悩のたびに和尚がこれを治癒させたとの記事がありますが、その礼として大臣は和尚に「巴子国劔」を贈って居ります。この劔は渡唐し遂に彼地でなくなりました三品親王が大臣に贈りました優劔でありまして、恐らく唐でも手に入れがたいペルシアの劔であります。和尚は刃間に「不動明王慈護之明」と金象嵌しその施入にこたえています。実は和尚は以後、病臥する人々にこの不動明王の鑱られました巴子国劔をふるい、病者に憑いた鬼神、天狐を却けたようであります。染殿皇后が天狐に悩まされること数ヶ月間、その間諸寺の有験の僧が加持祈禱されても治らない、そこで相應和尚が迎えられるのであります。すが験がない、和尚は護持して来た不動明王を責め愁い恨み祈り、天狐が紀僧正の後身であること、大威徳法で鎮めるよう教唆を明王から得、ついに皇后に憑いた天狐の追い出しに成功するのであります。こうした場面で巴子国劔―不動明王慈護之明劔が息づいたのであります。朗善大徳が死を迎えかけました時、この劔を揮ひ、鬼を打ち、すでに死門にありました朗善を蘇生させたのも和尚であります。

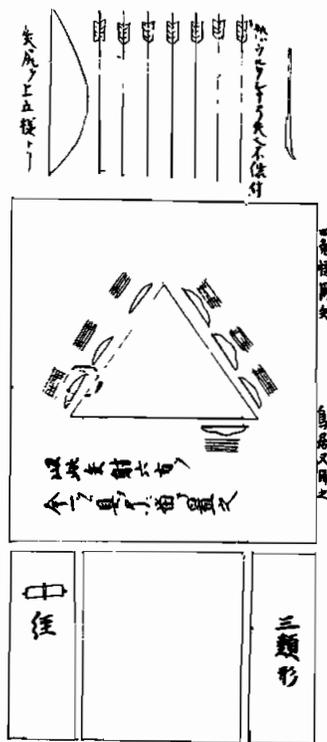
相應和尚の巴子国劔―金象嵌の不動明王慈護之明劔は、鬼神や天狐を払い、病悩から救う重要な働きをいたして居ります。「驚風虫鎮」加持で用いられる劍祓もまた同様な働きを果すものと考えてよいので

あります。武器としての劍とはまた少々異なる呪具としての劍の世界、劍敵の世界が垣間見られるのであります。

相應和尚が癒しました染殿皇后の病悩は天狐の仕業―紀僧正靈の憑依にありました。こうした天狐の世界は非常に重要な世界であります。

例えば『晴富宿彌記』の明応六年二月三日の記事に産が近ずき苦勞病悩がはげしく起り、連日連夜の祈禱投藥の効もなく遂に死去していく一女性の姿を記しておりますが、邪氣が甚しいため憑者―ヨリマシを招いて憑靈を求めましたところ、種々邪氣の寄りくるところを白状し、その驗としまして身体に多くの釘がうたれた痕が見られたと記して居ります。貴人の出産には常に強い怨念の凝固、噴出があり、こうした憑靈が走るのであります。妊婦の産悩は多くの場合こうした邪氣のよりつくところと観られていたのであります。一方、『建内記』の嘉吉三年七月廿一日の記事には征夷大將軍左中将足利義勝が十歳で夭逝しました時の情況が書かれています。「室町殿御事切」云々、自十二日御痢氣、十三日興盛及十度許、温氣以外、自十四日供御藥、件日母堂知給、……邪氣怨靈非一、鎌倉故武衛、一色故義貫、赤松故性具等云々、主人更不可有其恨、父公之御余殃無力事也」という記事であります。父足利義教が倒しました足利持氏、一色義貫、父義教を殺したため義勝の代で殺されました赤松満祐、そうした人々の怨靈が発動いたしまして十歳の將軍義勝が死に至ると理解されているのであります。こうした恐るべき怨靈のたたり、のろひを退ける術としては、その

寛恕を願う場合と、逆に怨靈を発する根源を調伏し降伏させようとする場合といった二つのパターンが生まれるのであります。たとえば先



の征夷大將軍足利義勝の場合は怨靈と化した持氏、義貫、満祐の子孫を求めその処遇を正しくするといった寛恕の方向が模索されております。しかし、仏教の場合、調伏・降伏法といわれる方法「六字経法」が用意されているのであります。六字経法は悪心を調伏して善ならしむる修法、怨靈、邪氣、悪鬼のたぐいを調伏して我身を護ろうとする修法であります。本尊の六字経法曼陀羅を掛けまして前に護摩壇を設けましてそこへ三角爐をしつらえます。三角爐は本修法を持色ずける爐制であり、五輪の火輪を象徴して居ります。火勢により悪霊怨敵を摧破しようとする調伏のための爐であります。壇の前面両脇に二つの机が据えられ、右の机には小土器に収めた「三類形」が、左の机には経が用意されるのであります。ところでこの三類形は本修法の本意を

語る重要なものであります。それは紙で作り薬で染めあげた天狐、地狐、人形の三類形各七枚であります。この三類形に呪咀怨家の姓名、もし判らぬときはその住所を墨書するのであります。呪咀し怨念を抱く者の使わしめである二類—天狐・地狐、呪咀する相手—人形が作ら



れ、これを三角爐で順次焼殺していくのであります。まず天狐七枚、次に地狐七枚を焼き、天と地から寄り来る呪者の使を焼殺しようとしているのであります。その焼殺の後は、呪咀は完全に消え去るものと考えているのであります。呪咀返し作法の一つの典型としてこうした三類形焼殺といったことがあるのであります。実はその焼かれた三類形の灰は集められ、最初この三類形を収めていた小土器に再び納められ蓋されて封じられるのであります。こうした呪儀が終りますと白糸五尺、もしくは六尺五寸の長さの練糸を六字呪を百遍念誦しつつ一結、千遍十結、萬遍百結しまして結線を作るとのことですが、

これは施主の身長—形代とでも言うべきものかと思えます。三類形の灰、三類形のなす怨念の働きを封じ六字呪で結びとめた結線の二種は怨霊、呪咀を封じ侵犯を防ぐ象徴でもあります。こうした二者はやがて験者から檀越や施主に送り届けられ、結線は身に帯び、三類形の灰は怨敵を降伏、調伏しました証しとしまして、あたかも薬であるかのように湯をもって服するのであります。

産褥や疫疾といった人々の苦しみ、悩みは単に疫病に発するものといった今日的な理解ではなく、その根源に常に怨霊、邪気、悪鬼の発動が極めて強く意識されていたのであります。こうしたモノ、オニに対応する、そうした呪術や呪符が人の心に深く入りこみ、中世・近世を見事に彩っていると言えるのであります。身を襲う病ひや災い、あらゆる不幸を攘いやる、そうした意図のもとに精緻なまじなひの体系が用意されているのであります。こうしたまじなひ世界に、神も佛も、また人も組みこまれ息ずき交感した時代があったのであります。

本稿の作成にあたっては福井県立博物館長杉原丈夫先生のご厚意で若狭湯尾峠茶屋の呪符を掲げることが出来、併せてその論考に接する機会を得た他、新潟県江上館の資料では中野豈任さん、「吉例瘡瘡之書」の紹介では、杉本利一さん、安藤信策さんのご好意を得た。記して感謝の意を表したい。